

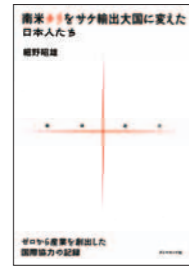
## チリのサケ養殖産業の発展に 貢献した日本

日本人の食卓で代表的なおかずと言えば「サケ」。しかし、スーパーの鮮魚コーナーに足を運んでみると、その多くが輸入品であることが分かる。中でも目に付くのが「チリ産養殖」の表示。実際に、日本に輸入されるものの多くがチリ産だ。

今では世界有数のサケ輸出国として知られるチリだが、40年前には、生息地ですらなかつたというから驚く。チリでサケの養殖が始まったのは1970年代末。何もないゼロの状態から、日本人専門家が現地の水産関係者とともに奮闘を続けた。途中、クーデターなど、幾多の苦難に直面しながらも、プロジェクトは進められ、20年にわたる日本とチリのサケ養殖に向けた協力、半官半民のチリ財団による事業化、日本企業の加工技術と輸出市場の開拓などを経て、ついに新たな産業として確立。今日では、世界で1、2を争うサケ輸出国に発展している。

今年8月、細野昭雄・JICA研究所 上席研究員がこの協力の歴史をまとめた『南米チリをサケ輸出大

国に変えた日本人たち』を出版。「現地に足を運び、さまざまな立場でプロジェクトにかかわった人々の取材をしました。チリ人と日本人の苦労を織り交ぜながら、長い時間軸でプロジェクトの成果を分析した“プロジェクトストーリー”です」と細野さんは話す。身近なサケを通じて、チリとのつながりが学べる一冊だ。



ダイヤモンド社  
1,575円(税込)

こうした取り組みを常に現地で支えていたのが、シニア海外ボランティアの柏木昭雄さん。「彼らが丸と丸とって奮闘する姿を見ていたので、何とか成功させたかったんです。工事が予定通り進むよう、日本にいる調査団メンバーと頻りに連絡を取り合いながら、細かい技術指導やスケジュール管理などサポートに徹しました」。

さらに、処分場の改修と並行して、モレタさんは周辺地域の住民を対象に環境教育も実施。日本の研修に参加した時、杉並区立杉並第十小学校で視察した、網に入れた生ごみを土に埋めて1カ月後に掘り出し、その変化を観察する方法を採用していた。「研修で学んだことを着実に生かしている姿に感激します」と、古澤さんは目を細める。



処分場で作業をするモレタさん(左から2番目)と柏木さん(左端)。「研修でたくさんの日本人に親切にしてもらったと、異国の地で活動する私のことを常に気遣ってくれました」(柏木さん)

# 海を渡った 福岡方式

## ドミニカ共和国で実を結んだ研修の成果

ごみ処分場の公害をなくすために、日本のノウハウを学びたいと来日したドミニカ共和国の研修員。JICAの研修を経て、さまざまな人の協力のもと、その成果がついに実を結んだ。

める。

2010年4月、かつて白煙に覆われていた処分場は、「エコパーク・ラフェイ」として生まれ変わった。ごみ山はきれいに土で覆われ、サンティアゴ市には青空が戻った。今後も3R※1の導入やスカベンジャー※2との連携など、新たな可能性を模索中だ。

日本での経験を胸に、これからも彼らの挑戦は続いていく。

※1 リデュース、リユース、リサイクルをキーワードに、循環型社会を目指す手法。  
※2 ごみの中から有価なものを探し、転売して生計を立てている人々。

「やっとこの日が来た」  
4月下旬、ドミニカ共和国の第2の都市サンティアゴ市。郊外にあるごみ処分場のリニューアル式典で、その様子を感慨深げに見つめる男性がいた。彼の名前は、サンティアゴ清掃公社職員のエドワルド・モレタさん。この道6年、ここ、ラフェイ処分場の環境改善に携わっている。  
「サンティアゴ市の人々は、ずっと、処分場の悪臭や煙害に悩まされてきました。何とか改善する方法がないかと、何年も模索してはいたんです」  
ラフェイ処分場が建設されたのは1970年代。市内で出るごみの大半が、ここに運ばれ廃棄されている。しかし、不十分な管理体制が続く、埋立地からは可燃物の燃焼により大量のガスが発生。上空は常に白煙で覆われ、周辺住民への健康被害にまで及んでいた。

この状況を早急に何とかしなければ。そこで2006年、清掃公社を代表して、JICA横浜が川崎市にある財団法人日本環境衛生センターと連携して実施する日本での課題別研修「廃棄物総合管理セミナー」にモレタさんが参加することに。69年に開設された歴史あるこの研修は、日本国内の自治体を視察し、廃棄物処理の適正な管理方法を学ぶのが目的。これまでに計67カ国、431人もの研修員が参加している。  
そこでモレタさんは、福岡大学の松藤康司教授の講義を聞き、ある手法に衝撃を受ける。日本の多くの処分場で採用されている「準好気性埋立システム(福岡方式)」だ。「ノウハウさえ理解していれば、施工も管理も高度な技術が必要としない。コストを最小限に抑

えながら、すべての問題が解決できる。これしかないと思いました」。

## 福岡方式で生まれ変わった処分場

帰国後、モレタさんは福岡方式の導入に向けて、本格的な計画づくりをスタート。日本環境衛生センターの古澤真澄さんいわく、「モレタさんは、最初から処分場の環境改善に的を絞って、日本でも積極的に情報収集に励んでいたんです。それ故に、彼が研修後に作成したアクションプランも、理想論ではない、現実的な内容である」と日本で高く評価されました。彼の熱心な取り組みの便りは日本にも届き、JICAは処分場の改修工事を後押しするため、フォローアップ調査を行うことになった。

調査団には、松藤先生をはじめ、福岡市役所や札幌市役所の担当者、民間



改修前のラフェイ処分場(右)は白煙と悪臭がひどく、住民からの苦情が相次いでいた。「福岡方式」の導入によりエコパーク・ラフェイ(左)として再生し、今では環境が劇的に改善されている



重機で穴を掘り、ガス抜き管を設置する清掃公社の職員と調査団のメンバー。発火防止を図るためのものだ

業者なども参加。年2回のペースで現地を訪問し、施工や管理方法などの指導を続けた。時には自らスコップを持ってごみ山を駆け上がり、現地の職員たちにアドバイスをする日本人の姿に、モレタさんたちの士気も高まった。